

# グアテマラ——虐殺の記憶とコミュニティ再生の拠点 ラビナル・アチ・コミュニティ・ミュージアム

せき ゆうじ  
関雄二 民博 研究戦略センター

ラビナル・アチ・コミュニティ・ミュージアムの入り口



歴史展示室入り口

## グアテマラ初の コミュニティ・ミュージアム

中米グアテマラの首都より車で四時間ほど北上すると、バハ・ペラパス州のラビナル市に着く。ミュージアムは町外れにあり、スペイン語とアチ語で記された小さな看板は、うっかりすると見過ごしてしまう。二〇〇一年、グアテマラ最初のコミュニティ・ミュージアムとして開館し、その名のとおり、ラビナル・アチというマヤ系先住民が自主的に運営する。設立趣旨には民族の歴史をとどめ、豊かな文化を伝承・発展させることが謳われている。

## 内戦下の虐殺の記憶

中庭を囲む展示室には、民族の起源を示す考古学遺物こそ飾られているが、展示の中心は、ラビナル・アチ集団の二〇パーセントにおよぶ四四一一名が虐殺された歴史にある。犠牲者の遺影と、虐殺状況を克明に記したテキストで溢れる部屋は静寂さに包まれ、重い空気が漂う。

グアテマラでは一九六〇年に内戦が始まり、一九九六年にゲリラ側と政府とが和平協定を締結するまで二〇万人もの国民が共産主義撲滅のスローガンの下で虐殺された。その多くは先住民であった。国軍が虐殺に手を下す場合もあれば、先住民に自警団を組織させ、同胞に銃口を向けさせた例もあった。つまり被害者と加害者が集落内で同居する状況さえ存在する。

そのため、復興には当事者間の和解が必要であり、虐殺を記憶にとどめ、暴力の連鎖を断ち切り、被害者の尊厳を讃える追悼施設が求められ、実際に各地で追悼施設が建てられた。しかし、追悼だけでは必ずしも和解にはつながらない。



虐殺犠牲者の遺影のあいだに内戦当時の大統領の帽子が展示されている。これは和平協定締結後、大統領来訪時に犠牲者の遺族が振り落としたものだ

## 共生空間の創造へ

暗く重い展示空間を一步出ると、向かいの展示棟には、現在そして未来に向けたメッセージを伝える別の部屋が控える。そこには子ども、特に少女たちが自ら撮影したマヤ系民族の日常生活の写真が飾られ、内戦で失われた民族の伝統再生を次世代に託す実践が試みられている。子どもたちが、情報端末に触れながらマヤ系言語を学ぶコーナーもある。このミュージアムは、民族の存在を否定された人びとが、過去を記憶しつつもあらたな共生空間を創造するという難題に自ら取り組む空間なのである。